

雑

録

第1回發明展覽會開催 特許局主催にて本秋 11 月の交開會に關し特許局長官より鐵鋼協會々長宛出品勸誘依頼、開會趣意書及規程、出品申込書送付せられたれば以下に掲載し、本會關係者に奮て出品せられる様勸誘します。但し規程及申込書は省略する故希望者は特許局内發明展覽會事務局に照會のこと。

出品勸誘狀

八特發明展第四號 昭和 8 年 8 月 7 日

社團法人日本鐵鋼協會々長殿 特許局長官 中 松 眞 卿

今般發明考案の普及發達を圖る爲別紙特許局發明展覽會趣意書特許局發明展覽會規程及同展覽會に關する告示に依り今秋 11 月の交第 1 回發明展覽會を東京府立商工獎勵館内に於て開催することと相成候に就ては本會の趣意を諒せられ本會の目的達成を翼賛せられ度貴會關係に於ては適當のもの多く可有之と被存候に付き別紙印刷物に付委細御了知の上出品方可然御高配相煩度此段得貴意候也

特許局發明展覽會趣意書

發明考案の普及發達は産業振興並に國防充實の基礎にして一日も之を等閑に附するを容さず

殊に現時の經濟不況を打開し滿蒙資源の開發を行ひ以て國民生活の安定を期すると共に多端なる國際政局に處し國威の發揚を圖らんが爲には種々の對策あるべしと雖も就中發明考案の普及發達に俟つもの多きは言を俟たず近年我國の發明界は長足の進歩を遂げ數量に於て歐米先進國の壘を摩するに至り實質に於ても往々彼を凌駕するものあるに至れるは頗る吾人の意を強うする所なり唯憾むらくは多數の發明考案中實施せらるるものは曉天の星の如く眞に寥々たるものなるを

從來當局に於ても發明考案を普く社會一般に周知せしむるが爲には公報の發行其他の方法を講じ來れるも未だ充分所期の目的を達すること困難なり

惟ふに優秀なる發明考案の出現を獎勵することは固より望む所なりと雖も結局期する所は其の實施にあり優秀なる發明考案如何に出現するも之を實施するの途なくば其の効果を發揮し國運の隆昌に寄與するに由なかるべし而して我國民は一般に外國品崇拜の思想未だ去らず歐米人の發明考案に係る製品の輸入又は權利實施の爲多額の對價を支拂ふに拘らず我發明考案の實施を躊躇するの風あるは國家經濟の發達上遺憾からず依て彼の美術に於ける帝國美術院展覽會の如く工藝に於ける商工省工藝展覽會の如く發明に付ても年々定期に展覽會を開催し最近の優秀なる發明考案を江湖に紹介せば獨り發明思想の涵養に資するに止まらず發明考案の實施に裨益すること蓋し尠少なからざるべしと信ず

茲を以て當局に於ては今秋十一月の交第一回發明展覽會を開催し聊か斯界の爲貢獻せんことを期す出品は最近數年間に於ける發明考案中より鑑査すべく現品たることを原則とするも叙上の如き目的を有するを以て雛形にても差支なく場合に依りては圖面若は圖解にても妨げなし之從來の發明に關する展覽會と多少其の趣を異にする點なり要は發明界に堪えず刺戟を與ふると共に發明實施の契機たらしめ且つは事業界に新たなる材料を供給せんとするに在り

由來發明の工業化は容易の業に非ず今回の展覽會の出品物中には

既に實驗を経たるものもあるべけれ共前述の如く新規なるものを事業界に供給するを目的とするの結果全然實驗を経ざるもの亦尠からざるべし之等は學者、研究家、實際家等が見て以て一應工業化の可能性ありと判定したるに過ぎざるを以て或は實驗の結果思はしからざるもの或は工業化するも經營上採算の困難なるものなきを保し難し然りと雖も多少の危惧ありとして拱手策を施すことなくば發明の埋没を救済するを得ず從來幾多有用なる發明考案が空しく世に顧られずして埋没したるは洪歎の極にして爲に國家の蒙りし不經濟や料り知る可からざるものあり之等の發明考案を救済し一日も速かに之を工業化せしめ社會をして其の恩澤に浴せしむるは今日の急務なり

各位宜しく此趣旨を諒せられ本會の目的達成を翼賛し本邦發明界の發達に貢獻し延いては國家の繁榮に寄與せられんことを切望す

統計上より觀たる歐米主要國製鐵業の昨今 (Iron & Coal Trades Review に據る) 昨年未曾有の不況を現出せる歐米製鐵諸國の概況は第 1 表の鋼材需給調に示す通り米國は 1929 年

第 1 表 世界主要國鋼材需給調 (單位 1,000 噸)

		1929 年	1930 年	1931 年	1932 年
米 國	生産高	41,249	29,666	19,292	10,110
	輸入高	445	254	254	208
	輸出高	1,965	1,295	657	283
	需要高	39,729	28,624	18,839	10,035
獨 逸	生産高	11,285	8,152	5,861	4,187
	輸入高	1,142	852	628	547
	輸出高	4,467	3,730	3,260	1,957
	需要高	7,960	5,273	3,229	2,775
佛 蘭 西	生産高	6,762	6,587	5,470	4,070
	輸入高	147	163	155	92
	輸出高	1,507	1,448	1,322	903
	需要高	5,403	5,302	4,303	3,259
白耳義 ルクセン ブルグ	生産高	5,656	4,831	4,306	3,800 (概算)
	輸入高	125	121	78	53
	輸出高	3,873	3,274	3,039	2,716
	需要高	1,908	1,678	1,345	1,137
英 國	生産高	7,747	6,218	4,756	4,495
	輸入高	1,129	1,055	941	584
	輸出高	3,492	2,548	1,594	1,508
	需要高	5,384	4,726	4,104	3,571
日 本	生産高	2,034	1,921	1,662	2,174
	輸入高	785	435	263	228
	輸出高	26	68	70	122
	需要高	2,793	2,283	1,856	2,280

の好況年間に於て 41,249,000 噸の鋼材 (鍛鋼品及び鋼鑄物を含む、以下各國共同) を産出し、輸入 445,000 噸、輸出 1,965,000 噸差引需要高 39,729,000 噸といふ龐大なる數字を示せるが、昨 1932 年に於ては生産高、需要高共約 1/4 に減少した。其の他の國も 1/2 乃至 1/3 の減少を示せるが獨り日本のみは東亞の風雲に乘じ却て好轉を示せる事情にある。本年に入り鐵鋼の生産高は各國とも概ね増進傾向を辿りつつある。就中昨年特に前代未聞の慘狀を呈せりと報ぜられた合衆國に於ては本年 5 月頃より急角度の好轉を示し昨年中及本年 3、4 月頃までは 40 乃至 50 基に過ぎなかつた操業高爐數は一躍 5 月に 63 基となり、6 月には更に 28 基に火入れせられ、吹下ろしの分を差引 89 基を數ふるに至つた。6 月の生産高合計は 5 月の 892,326 噸及び昨年 6 月の 626,015 噸に對し 1,261,600 噸に増加し日産平均 42,050 噸を算して、1931 年 7 月以來の最高數字を現出したと報ぜられて居る、一方鋼の生産高は需要の増加に伴ひ、逐

第2表 世界主要國月別操業高爐數と銑鐵生産高調

	英國		米國		獨逸		佛國		白耳義		ルクセンブルグ	
	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸	操業 高爐 基	銑鐵 生産高 千噸
1932 年 1 月	76	335	61	988	48	358	83	490	43	247	21	150
2 月	71	329	64	980	42	330	81	458	43	244	21	150
3 月	72	341	60	983	41	314	78	471	43	249	21	151
4 月	69	322	60	866	40	336	79	460	40	245	22	159
5 月	69	320	53	796	41	381	79	459	40	247	22	160
6 月	69	316	46	637	38	310	79	452	38	235	21	157
7 月	56	297	46	581	36	294	81	455	34	174	21	160
8 月	57	264	42	539	40	268	82	457	33	217	22	168
9 月	59	265	47	602	32	273	81	445	33	219	22	170
10 月	59	280	49	655	39	333	81	457	—	225	22	178
11 月	59	272	51	641	40	371	82	458	—	235	22	181
12 月	60	289	42	555	42	364	82	488	37	247	21	172
1933 年 1 月	62	291	46	578	46	403	82	488	37	249	21	166
2 月	63	275	45	563	45	340	82	452	36	225	22	167
3 月	70	338	38	551	46	426	85	525	35	246	22	177
4 月	69	330	48	634	—	374	87	516	—	230	22	170
5 月	72	345	63	902	—	415	—	554	—	252	—	172

備考 各國高爐現在總數次の如し。

英國 348 基 (1932 年初頭調)、米國 288 基 (1932 年初頭) 282 基 (1932 年末)、獨逸 153 基 (1932 年中及び 1933 年現在數)、佛國 210 基 (1932 年初頭)、白耳義 62 基 (1932 年初頭)、ルクセンブルグ 46 基 (1932 年中及び 1933 年現在數)。

日増加し其の能力に對する生産率は昨年の 14 乃至 20% に對し本年 5 月には 34% に増加し更に 6 月末には 54% に増加し 1931 年初頭以來初めて能力の半數以上に達したが銑鋼共生生産率は逐日増加の傾向にある、合衆國のみならず各國共本年に入り操業高爐數の逐月増加しつつあるは第2表に示す通りである。鋼塊の生産高は茲に掲示せざるもこれ亦より以上の増加率にある。鋼材の輸出入は本年に入り、4 月までの統計にて(紙面の都合上掲せず)、佛國は輸入増加、輸出減、白耳義ルクセンブルグは輸出入共増加、ドイツは輸入増加、輸出減、合衆國は輸出増加、輸入減、英國は輸出入共減少の傾向に在り、日本は 5 月までの統計にて 2 月以降輸出入共増加しつつある。

(M. M 生)

英國の銑鋼活況 (Iron and Coal Trades Rev. June 15, 1933) 倫敦 6 月 13 日—銑鐵の活況に伴ひ、英國に於ては需要を見越して數基の高爐に再火入れの準備を成しつつありと云ふ、半製品業者は大陸からの輸入減少に依つて好況に恵まれてゐるが、然し大形壓延工場に於ては造船業者の注文簿に腦んでゐる。

銑力板は最近に於ける錫價の値上りに伴ひ、價格の強調を持続しては居るが然し取引數量は大したものではない。然し加奈陀は最近相當數量の注文を英國に發した、前週ウェールズの銑力板生産高は暑氣の爲め影響を受け目下の生産率は 60~65% である。

(M. M 生)

露西亞の製鋼能力 1 割 5 分電化 (電氣爐總數 449 基) (Iron and Coal Trades Rev. June 15, 1933) ロシアは目下大規模に電氣爐を建設しつつあるが最近モントリオールに開催された電氣化學協會の會合に於て、電氣爐顧問技師フォンボーア氏の報ずる所次の如し。1934 年に於て作業し得る電氣爐は合計 449 基に達す、而して製鋼に向けらるゝヘーロルト式爐 256 基の年能力は 1,600,000 噸に達すべく露西亞製鋼高合計の 1 割 5 分に相當す。合衆國に於ては電氣爐の鋼塊生産高は製鋼高合計の 1% 以下である。1932 年に終る 5 ケ年に於て 205 基の電氣爐を建設せられ本年建設中のものの 95 基あり、而して 1914 年以來輸入されたるもの 149 基を數ふ、1934 年に於て作業し得べき合計 449 基の電氣爐中ヘーロルト式爐

次の如し。

容量	4t	6t	10t	15t	約30t
基數	86	49	26	1	1

最後の 2 基は本年建設計畫中のものである。電氣爐の約 8 割 4 分はデトロイト爐を含むアーク式のものであるが然し Ajax-wyatt type の誘導式及び高周波並抵抗のアルミニウム熔解爐も若干ある。電氣爐の多くはボーア氏の設計に依つて建設されたものであつて、氏は 1931 年及 32 の兩年露國に在つて作業監督の任に當つた人である。

(M. M 生)

チエコスロバキヤの鐵鋼業

(Iron and Coal Trades Rev. June 30, 1933)

1932 年の概況 在 プラーク英國公使館付商務官エッチ・カーショウ氏の本國政府宛チエコスロバキヤ 1933 年 3 月迄の經濟事情に關する報告中昨年に於ける其の鐵鋼業の概況次の如し。

鐵鋼業— 1932 年チエコスロバキヤ鐵

鋼業の窮境は次の生産高に依つて看取することが出来る、即ち 1929—30 年度に於ては粗鋼約 2,000,000 噸、銑鐵 1,645,000 噸に達したるが昨年は粗鋼約 580,000 噸、銑鐵 380,000 噸の生産を見るに過ぎなかつた。故に 3 ケ年間に於て生産高は約 75% の減少を示したのである。壓延工場の事情は一層悪化し生産高は同一期間に於て 400,000 噸から 50,000 噸に激減した而も生産業者は輸出貿易を有効に維持する意味に於て割戻金が與へられて居つたにも拘らず斯くの如き事態を現出したのである。此の輸出割戻金は 1930 年には 25,000,000 kc. に達し又 1932 年の最初 10 ケ月間に於ては 15,500,000 kc に達したのであつた。

チエコスロバキヤの諸工業の事情は皆不振状態にあつたが然し冶金工業程の難境を示せるものはなかつた。難件は目下一切の製造工業の活動を妨ぐものと同一のものであつたが然しながら鐵鋼業に對しては特に一層の重壓を加へたのであつた、何となれば生産能力の膨脹は勢い輸出貿易に依頼せざるを得ない斯業固有の弱點があつたからである。チエコスロバキヤの鐵鋼工場は最近數年間に於て世界市場に於ける競争力を増さんか爲め設備の擴張及近代化に多額の資本を投下したのであつた。尙又國內價格を比較的に高くし輸出に力を注ぐ政策を採用せるが爲め生産業者は鐵鋼製品の消費者として比較的取引の少ない内國市場に於ては不利の地位に立つたのであつた、故に關稅若くは外國爲替管理の結果として輸出市場が事實上閉鎖された今日に於ては製造業者は經常費を償ふに困難であつて同時に利益を収め得ざるの現状に在る、是等の苦痛を軽減せんが爲め 1932 中には或二、三の工場を全然閉鎖し他工場に生産を集中したのであつた、1932 年中に於ては更に 3 基の高爐が吹下され全國合計 27 基の高爐中 1933 年初頭に於ける操業中の高爐は僅に 5 基に過ぎなかつた。Poldi, Prague, Ceskomoravsk, 及び Skoda 製鐵會社等の如き主要鐵鋼會社は皆昨年著しき勞銀の引下を行つたが尙引繼ぎ縮小方針を取つてゐる。露西亞から 1933 年早々チープ及び壓延鋼材の注文があつたが然し其の取引の量は前年に比ぶれば極めて少量である、1933 年の初頭主要なる自動車製造會社が全く生産を中止した。鐵道車輛製造業者は國有鐵道からの注文に依つて相當數量の

取引を獲得したが然しながら此の種の大量契約は極めて少なかつた最近製鐵業者の代表者は國家的短期救済公債發行問題の促進方を政府に勸奨する所あつたが彼等は斯の如き經費の支出は建築事業に對する鐵鋼の需要を復活せしむるであらうといふ點に望をかけて居る。

冶金工業に於けるチエコスロバキヤの生産業者は國際鋼カルテルの會員であつて又銑鐵レール、壓延線、チューブ、鐵線、ワイヤーネット等の生産及び販賣に關する其の附屬協約の會員でもある。

(M. M.)

合衆國と滿鐵鑛石の供給 (戦争の緊急に應ずる準備)

(Iron and Coal Trades Rev. June. 30, 1933.) 軍事上及び其の他の意味に於て重要な鑛物に關する論文集が約10年前亞米利加探鑛冶金協會の内外探鑛政策委員會と亞米利加探鑛冶金技師學會の工業準備委員會との共同指導の下に製作されたが其の後是の論文集は鑛物の國際管理 (International Control of Minerals) と題して發刊された (1925年) 其の内滿鐵に關する一論文があつた、滿鐵の分科委員は二の形式に於て其の論文を作成した其の一つは前述の論文集に包含せしめ以て特に國際的問題として取扱はずとするものであつて其の二は斷然滿鐵を國防問題の要素として論じたるものである、此の第二様式の論文は最初軍事當局の要求により機密報告として 1924 年 1 月 24 日附を以て執筆されたものであつたが其の後記事解禁と同時に公表さるに至つた、爾來 8 年経過の今日再び軍事當局は戦時の緊急に對する産業的準備問題に於て滿鐵の重要な地位に鑑み、1924 年の結論を再調し現在の事情を之れに加味せんことを要求したのであつた。新報告は 1932 年 2 月軍事當局に提出せられたが本報告も解禁公表せらるに至つたので茲に其の摘要を抜萃することにする。報告は先づ第 1 に滿鐵の使用、鑛石の分類、滿鐵の需要を論じ然る後滿鐵の全消費問題に言及して居る。1924 年分科委員會が報告を作製せる際は其の計算の基礎を鋼の長噸當り平均消費高を 13 封度とした然し平均消費高は 1924—26 年に於ては 14.7 封度に増加したが 1927—29 年に於ては 14.1 封度に落ち其の後再び増加傾向を示すに至つた。1922 年以來の平均は 14.5 封度で、尙滿 20 年間の平均は 14.2 封度となつてゐる斯の如き事情に鑑み分科委員會に於ては彼等現在の豫測に對し合金の形に於ける金屬滿鐵の消費を 14.3 封度として居る又鋼の推定生産高に關しては彼等は 60,000,000 噸と見て居るが此の噸數に鋼 1 噸當り金屬滿鐵 14.3 封度として合金の形に於ける金屬滿鐵 383,000 長噸を消費するであらう、勿論こは高滿鐵銑鐵中の滿鐵又は其の他に使用される滿鐵を含まない。

スビーゲルに對し 16% を差引き及び化學用途の鑛石を加へ、分科委員會に於ては戦時緊急第 1 年に於ける滿鐵鑛石需要高を 825,000 噸と見てゐる、此の外滿鐵分 7—8% の低度鑛石約 2,500,000 噸を高滿鐵銑鐵及其他鐵鋼業の目的に對し準備し置かねばならぬ。國內の資源が未だ甚だしく消盡せられないと假定し及び戦争第 1 年に於て 150,000 噸の鑛石を強制的に生産し得とすれば且個人ストックの

金屬滿鐵が間違ひなく 100,000 噸もあるものとすれば、及び鋼の生産高を 60,000,000 噸と假定すれば轉換ロスを差引き 48% 鑛石の純不足額は約 680,000 噸に達するであらう、事情斯の如きが爲め分析科委員に於ては 1924 年の報告に於けると同一の結論に達せざるを得なかつた、即ち國防を充實する爲めには滿鐵鑛石の戦時資源は實に重大問題である。1924 年に於て彼等は標準品位の鑛石 600,000 噸の戦時資源を要求したが今日に於ては 700,000 噸の資源を要求すべきであつて此の數字は若し國內の資源が其の内甚だしく消盡さるゝとせば更に 100,000 噸を加へられねばならない。

然しながら分科委員會に於ては、低度鑛石處理法の發達に依つて此の戦時資源要求高の加減が出來得るものと指摘して居る。

(M. M.)

露西亞マケエフカ (Makeyevka) 鐵鋼工場の改造

(Iron & Coal Trades Rev. May 26, 1933) ドネツ盆地のマケエフカ冶金工場は戦前に於てはロシアの最大鐵鋼工場の一であつて銑鐵爐 3 基、20 噸平爐 4 基、40 噸平爐 2 基及び若干の壓延工場を具備して居つた。1913 年に於ける本工場の生産高は銑鐵 228,000 噸鋼 170,000 噸及び壓延鋼材 129,000 噸であつたが内亂中生産は殆ど中止の姿にあつた、然し 1925—26 年度に於ては前數年間に實行された廣範圍に亘る改造の結果生産高は 1913 年の數字を突破するに至つた。第 1 次 5 ヶ年計畫に於ては本工場を充分改造するの計畫を樹て先づ第 1 に銑鐵爐の改造に着手した、1929—31 年の期間に於て亞米利加式の充分に機械化された 3 基の新高爐が建造されたが其の能力は舊高爐の能力に殆んど倍加 (430 M³ が 842 M³ となる) するに至つた。マンガニ鐵製造用として舊高爐の 1 基が現在操業されて居る。1932 年に於ける本工場銑鐵生産高は 610,000 噸に増加し即ち 1913 年生産高の 267.5% に増進したが生産高は供給さる鑛石の粉末化し易い性質と使用炭灰の灰分高きが爲め若干妨げられたのであつた。1933 年即ち本年始めに於て各基能力 1,163 M³ の新高爐 2 基と低度鑛石利用設備の建設とに着手した。本工場の炭灰供給不満足であつた爲め年 1,300,000 噸の炭灰其他化學製品、瓦斯等の生産を目的とする新炭灰工場が建設された。1928 年に於て能力 80 噸の新平爐 1 基設置されたが使用ナフサ (揮發油) の高價と爐能力一般的に小なりし爲め結果は期待程に行かなかつた。故に 1932 年に於ては各基能力 150 噸の新平爐 12 基の建設に着手し内 4 基は本年初期に完成した、是等改變の結果 1932 年に於ける鋼の生産高は 234,000 噸 (1913 年生産高の 173%) に達し又壓延鋼材の生産高は 231,000 噸 (1913 年の 179%) に増大した。本工場の改造が完成する曉に於ては銑鐵の生産高は 1,500,000 噸、鋼は 1,300,000 噸及び壓延鋼材は 1,200,000 噸に達するであらう。露西亞技師の設計に成る最初に分塊工場は去る、2 月 14 日本工場に於て作業を開始した。分塊工場はレニングラードのイヅホラ工場にも建設せられ又チエルツホンスキ冶金工場に於ても同様の一分塊工場が完成せるが更に工場を目下建設中である。

(M. M.)

内外最近刊行誌參考記事目次

大日本窯業協會雜誌 第41集 第487號	
マグネシア耐火物に就て(第2報) 化學組成と品質との關係	近藤清治、吉田博 (353)
南滿洲大石橋附近主要マグネサイト礦區一覽	梅田晋五郎 (366)
耐火物の合成と過熱水蒸氣との關係	青 武雄 (382)
製鐵研究 第131號 昭和8年6月	
チルドロールに及ぼす珪素の影響	谷口 光平 (1)
滿庵含有量が壓延鋼材の機械的蓄性質に及ぼす影響に就て(第2報)	城正俊、長井峻一郎 (9)
箱板の水分及び吸濕試驗報告	高山 正寛 (27)
洞岡第一鑄鐵爐原料設備の一部及び作業に就て(1)	松尾覺郎、新森龜尾 (1)
石炭時報 第8卷 第7號 昭和8年7月5日	
改正鑄夫勞役扶助規則の實施に就て	北岡 壽逸 (2)
日滿倉庫川崎埠頭機械設備の概況	松田 和三 (578)
煉炭原料の濕分とタールベッチに就て	松野 榮治 (599)
應用物理 第2卷 第7號 昭和8年7月	
鑄造合金の逆偏析に就て	山口桂次、中村晃三、上村勝二 (253)
鑄物 第5卷 第7號 昭和8年7月	
鑄鐵の腐蝕疲勞	佐々木新太郎 (448)
機械學會誌 第36卷 第195號 昭和8年7月	
鑄鐵梁の曲げによる破壊に就て	中西不二夫 (439)
鑄鐵圓棒の振りによる破壊に就て	中西不二夫 (444)
材料の粘性變形の安定度	藤田駿、淺川勇吉 (460)
鐵道工場に於ける電氣銲接作業	山口 貫一 (472)
氣筒壁に於ける溫度及内分力の分布	小林 明 (477)
工業化學雜誌 第36編 第7冊 昭和8年7月5日	
白金及び白金ロヂウム熱電對の溫度目盛	尾藤堅、松井元太郎 (1011)
白金及び白金ロヂウム熱電對の檢度並びに使用上の注意	尾藤堅、松井元太郎 (1017)
酸性白土添加石炭低溫乾溜試驗報告(第1報) 酸性白土添加の石炭低溫乾溜に及ぼす影響	小林久平外2名 (1018)
朝鮮鑛業會々報 7月號 昭和7年7月1日	
朝鮮に於ける十大鑛物	立岩 巖 (1)
低品位金鑛石の開發	穂積殖産局長談 (10)
電氣評論 第21卷 第7號 昭和8年7月10日	
クローム酸溶液より金屬クロームを電解析離する方法の研究	大藪幸太郎 (571)
採鑛冶金月報 第11年 第7報 昭和8年7月15日	
錫鑛の濕式製鍊(三)	野滿 朝亮 (193)
水曜會誌 第8卷 第2號 昭和8年6月30日	
耐鑄鋼の一研究	小田 助男 (231)
銅、鉛二元系合金の研究	西川 政一 (239)
鑛物粒子の水中自由沈降速度を表はす一範式と石炭粒子に就ての實驗	三雲英之助
金屬 Vol. III-No. 7 1933年 7月號	
鉄力鈹の性質に就いて	吉田清三郎 (372)
本邦に於けるアルミニウム原料	吉木 文平 (280)
金屬の熱膨脹に就いて	窪田格太郎 (284)
日立評論 第16卷 第7號 昭和8年7月25日	
撚線の撚程と幾何學的線間隙	倉田主税、後藤重太郎 (371)
電氣化學 第1卷 第1號 昭和8年7月	
アルミニウム陽極膜の生成法と其應用	瀬藤象二、高田聰 (15)
講義 電氣製鋼	向山 幹夫 (35)
産業公論 第4卷 第8號 昭和8年8月1日	
石炭需給關係とその統制機能	古田 慶三 (31)
新興滿洲國に期待される二大創立會社	日滿アルミニウム會社、滿洲電信電話會社 (36)
電氣製鋼 第9卷 第7號 昭和8年7月15日	

電氣爐製鉄理論(其の一)	向山 幹夫 (257)
電氣製鋼法の新傾向(其の二)	川崎舍恒三、林達夫 (269)
自硬性低炭素中クロム鋼の諸性質	關口春次郎 (275)
日本鑛業會誌 第49卷 第579號 昭和8年7月	
エンパイヤー式ドリル使用法	日下部義太郎 (555)
亞鉛電解に關する研究 第2報 電流能率連續的測定及び不純物の影響	小川 芳樹 (571)
硫酸銅、硫酸及び水素系の平衡と銅飽和溶液の電導度に關する研究	平社敬之助 (589)
金屬の研究 第10卷 第7號 昭和8年7月	
鐵-アルミニウム系平衡狀態圖のX線的研究	大澤 興美 (277)
鹽浴用鹽類の平衡狀態圖の研究(第1報) 硼砂-鹽化ナトリウム-鹽化カリウム系平衡狀態圖	佐藤知雄、砂見淳一 (290)
常溫加工を施せる金屬及び合金の時效硬化に就いて	河合 匡 (302)
滿洲技術協會誌 第10卷 第56號 昭和8年7月	
滿洲の工業に就て	斯波忠三郎 (292)
滿洲國の電力統制に就て	糟谷 陽二 (295)
滿洲大石橋附近菱苦土鐵鑛床概説	新帶國太郎 (309)
滿蒙の石炭資源と其の將來	久保 孚 (316)
オイルセール工業に就て	岡村 金藏 (318)
滿蒙に於ける鑛物資源一汎	木村 六郎 (323)
セメント工業に就て	國吉 喜一 (341)
朝鮮鑛業會誌 第16卷 第2號 昭和8年6月15日	
兵器と金屬(講演速記)	富田作太郎 (1)
咸北に於ける鱗狀黑鉛の精製に就いて	植村 藤藏 (13)
朝鮮の金鑛業視察を了へて	横堀治三郎 (31)
イギリスの石炭	在津 勝治 (53)
昭和七年度金探鑛獎勵の實績大要	(77)
鑄工 第9卷 第7號 昭和8年7月1日	
直立面の熔接に就いて	田梅 靜一 (20)
日本化學會誌 第54帙 第7號 昭和8年7月28日	
定性分析に於ける磷酸根の影響除去に關する研究(第2報) 蒼鉛鹽法及びジルコニウム鹽法	石丸 三郎 (615)
アルカリ性溶液に於ける過マンガン酸加里滴定に就て(碳酸、亞砒酸、マンガン及タリウム)の定量分析法	加藤 久次 (642)
造兵彙報 第11卷 第8號 昭和8年8月1日	
刀具の切削能率に關する研究	岡本定次外2名 (1)
石炭時報 第8卷 第8號 昭和8年8月5日	
石炭の鐵道輸送上に於ける特性に就て	生野源太郎 (2)
石炭の運搬及積込用としてのコンテナ	廣田理太郎 (26)
鑛業判例瑣談	鹽田 環 (31)
東京帝國大學航空研究所彙報 第107號 昭和8年7月	
航空機操縦用の不反撥性(シノサイ式)鋼索と普通撚鋼索との比較試驗	小川太一郎外2名 (413)
鑄物 第5卷 第8號 昭和8年8月	
耐海水輕合金の鑄造法に就て	海軍艦本部 (493)
油中子に魚油の應用	大西信三郎 (497)
研究報告 三菱航空機株式會社 昭和8年7月	
70 _{ig} クローム不銹鋼の熱處理に就て	須永 信二 (1)
Roller Bearing に就て	石澤 命知 (22)
裏付合金の使用溫度範圍に於ける粘性變化	森 義彦 (33)
R. R. 53 合金の一例	池田 傳 (48)
九州鑛山學會誌 第4卷 第1號 昭和8年7月25日	
歐米炭鑛視察談	里村 靜一 (1)
骸炭副産物に就て	高山 正寛 (45)
研究報告 第8號 住友伸銅管株式會社 昭和8年6月	
鑛管及過熱器管の材質的研究(第2報)	細川武良司 (499)

昭和8年6月中(八幡)製鐵所銑鋼生産高表 (單位噸)

銑 鐵			鋼 塊			鋼 材		
當月生産高	前月比較	1月以降累計	當月生産高	前月比較	1月以降累計	當月生産高	前月比較	1月以降累計
85,847	+ 2,122	477,674	124,506	- 5,879	749,829	101,276	+ 1,057	601,231

主要製鐵所に於ける鐵鋼材生産表 (單位噸)

(商工省鐵山局)

- 減

品 目	5 月 分			1 月 以 降 累 計			
	昭和8年	昭和7年	比較増減	昭和8年	昭和7年	比較増減	%
銑鐵(内地朝鮮滿洲鋼片)	125,621	102,787	22,834	579,216	387,407	191,809	49
普賣通鋼	38,269	31,113	7,156	188,363	118,239	70,127	59
販同シ	266,401	193,558	67,843	1,231,996	726,237	505,759	69
鍛造鋼材	6,651	6,768	117	49,867	21,040	28,827	137
普通鋼壓延鋼材	9,376	16,665	7,289	57,663	52,302	5,361	10
	6,874	2,149	4,725	21,643	6,829	14,814	216
	216,151	158,382	57,769	984,285	616,781	367,504	59
普 通 鋼 壓 延 鋼 材 内 譯							
厚0.7mm以下鋼板	25,997	28,023	- 2,031	128,305	102,192	26,113	25
其他鋼板	41,049	22,841	18,208	190,476	90,677	99,799	110
棒鋼	59,173	43,168	16,005	253,563	165,448	88,115	53
形軌鋼條	31,993	20,850	11,143	144,926	88,021	56,905	64
線鋼材	18,968	16,573	2,395	93,712	63,495	30,217	47
鋼其	23,770	15,878	7,392	107,575	69,065	38,510	55
	12,370	8,411	3,959	51,741	30,893	20,848	67
	3,331	2,633	698	13,987	6,990	6,997	100

主要製鐵所に於ける鐵鋼材生産表 (單位噸)

(商工省鐵山局)

- 減

品 目	6 月 分			1 月 以 降 累 計			
	昭和8年	昭和7年	比較増減	昭和8年	昭和7年	比較増減	%
銑鐵(内地朝鮮滿洲鋼片)	135,934	102,620	33,314	715,150	594,873	120,277	20
普賣通鋼	35,824	33,081	- 257	224,190	183,564	40,626	22
販同シ	243,332	193,147	50,185	1,475,328	1,132,689	342,639	30
鍛造鋼材	6,248	6,296	- 48	56,115	32,835	23,280	70
普通鋼壓延鋼材	9,625	16,155	- 6,530	67,288	83,042	- 15,754	- 18
	4,269	2,194	2,075	25,912	10,423	15,489	143
	202,031	157,569	44,462	1,186,316	944,853	241,463	25
普 通 鋼 壓 延 鋼 材 内 譯							
厚0.7mm以下鋼板	26,252	25,480	772	154,557	155,088	- 531	
其他鋼板	34,728	25,947	8,781	225,204	143,246	81,958	57
棒鋼	58,336	42,408	15,928	311,899	253,212	58,687	23
形軌鋼條	24,991	18,793	6,198	169,917	124,046	45,871	36
線鋼材	21,994	19,125	2,869	115,706	106,295	9,411	8
鋼其	22,550	15,455	7,095	130,125	103,453	26,672	25
	10,433	8,240	2,193	62,174	47,978	14,196	29
	2,747	2,121	626	16,734	11,535	5,199	45

昭和8年外國銑輸入高 (單位噸)

(銑鐵共同販賣會社)

月 次	輸 出 國 名					計
	印 度	英 國	獨 逸	米 國	其 他	
1	2,450	51	—	—	—	2,501
2	5,052	406	—	—	—	5,458
3	11,338	—	—	—	—	11,338
4	10,711	—	—	—	—	10,711
5	14,439	1,016	100	—	4,551	20,106
6	25,760	711	—	101	450	27,022
計	69,750	2,184	100	101	5,001	77,136